
スマトラ島南部ランプン市の華人の 言語使用と言語意識¹⁾

内海 敦子*

要 旨

インドネシア国、スマトラ島には30を超える民族が居住している。ランプン州はスマトラ島の南端に位置し、先住民のランプン人の他、多数の流入者が居住する多民族地域である。本論文では、そのうちの華人を対象に行った社会言語学的調査票の結果を分析し、バンドル・ランプン（Bandar Lampung）市に居住する華人が、どんな場面でどんな言語変種を使用しているか、また、祖先の言語である中国華南地域の各方言をどのように伝承しているかを解明する。

1. スマトラ島とバンドル・ランプン市の概要

1.1 地理的および歴史的観点からの概要

スマトラ島はマラッカ海峡をはさんでマレーシア半島と相対し、南端はジャワ島と相対している。世界で6番目に大きな島で47万平方メートル以上という広大な土地はインドネシアの領地の24.7%を占める。地形も変化に富み、民族も数十にのぼる。インドネシアの中ではジャワ島に次いで人口が多く5千万人ほどが居住しているが、土地が広いので、人口密度は低く（1平方キロメートルあたり123人程度）、人口密度の高いジャワ島（1平方キロメートルあたり1121人程度）などからの人口流入が長年続いてきた。

スマトラ島は、アチェ、ミナンカバウ、パタックなどの民族の他に十数の民族が存在するが、一番多いのはマレー人である。アチェやパタックなどの言語はマレー語とは異なる系統に属するが、ミナンカバウをはじめ、多くの民族語もマレー語と非常に近い関係にある。古くから交易の要衝で、7世紀から13世紀にかけて存在したシュリーヴィジャヤ王国、15世紀に栄えたマラッカ王国などが存在した。イスラームの受容も早くから行われたため、ほとんどの民族がイスラーム教徒である（ただし、パタック人にはキリスト教徒も多い）。

ランプン州はスマトラ島の南部に位置し、北にはマラッカ海峡、東にスンダ海峡を挟んでジャワ島と面している。バンドル・ランプン市（Bandar Lampung、以下ランプン市と記す）は、ランプン州の南端に位置する、州都である²⁾。

1.2 ランプン市の人口構成

ランプン州のあたりに元から居住している民族はランプン人である。ランプン市はジャワ

島やマラッカ海峡に面していることもあり、交通の要衝であったため、他地域からの人口流入は継続的にあった。1960 年代からのインドネシア政府の移住政策 (transmigrasi) により、多くのジャワ島からの人口流入が見られた。2010 年度のインドネシア統計局 (Badan Pusat Statistik) による統計では、ランブン市の人口に占めるランブン族の割合はわずか 16% であり、残りはジャワ人をはじめ、マドゥラ、バリなどのスダ諸島や同じスマトラの他地域 (パレンバンやジャンビなど) からの流入者である³⁾。

1.3 ランブン市における言語使用

ランブン語は大きく三つの方言、Api 方言、Nyo 方言、Komerling に分けられるとされる⁴⁾ (Amisani 1986, Anderbeck 2007)。これらの方言は、互いにかなり異なり、意志疎通が難しいという事情があった (Matanggui 1984)。国家語としてのインドネシア語が広まるにしたがって、異なる方言を話すランブン人同士は、それぞれの方言よりはインドネシア語を用いて意思疎通を行うことが多くなっていった (筆者の 2017 年 8 月の調査による)。

その上、ジャワ人をはじめ、多くの他民族が流入したため、ランブン市のような中心地においては、インドネシア語の口語地域方言が主として使われることになった。

インドネシア国は独立後、国家語としてインドネシア語を制定した。インドネシア語の標準変種はシュリーヴィジャヤ王朝で用いられていた書き言葉の伝統を持つ書記言語であり、政府機関、放送、教育、宗教儀式で主に使われる言語である (Collins 1998, 森山 2009)。これに対し、インドネシア語の口語変種は通商言語として用いられた歴史を持ち、ビジンとして用いられてきた。それらの口語変種は地域ごとに様々な特徴を持ち、中にはクレオール化したものもある (Adelaar 2005)。

ランブン市ではもともと居住していたランブン人の方言の変異が大きく、意志の疎通が難しかったこと、そして他地域から異民族の流入が激しかったことにより、多くの公的な場面と買い物や交通機関の利用など不特定多数と接する場面においてはインドネシア語が一番に選ばれる状態が 50 年以上続いてきた。地域的な変異の少ないインドネシア語の標準変種は役所、教育、放送、儀式などの公的な場面で使用され、地域的な変異のある口語変種はその他の不特定多数と接する場面で用いられる。

ただし、同じ民族は固まって居住する傾向にあり、親族間の面会も頻繁に行われる文化状況においては、ランブン語、ジャワ語などそれぞれの集団が元々話していた言語 (ancestral language) が私的な場面でも活発に使用されることもある。

2. インドネシアおよびランブン市における華人

中国からの移民の子孫は華僑あるいは華人と呼ばれる。華僑は一般的に中国籍を保持している人々、華人は移民先の国の国籍を持っている人々とされることが多い。本論ではインドネシア国籍で中国をルーツに持っている人々を対象に調査をしているので、以下では「華人」という用語で統一する。なお、もともとインドネシア国内のどこかにルーツを持つものをインドネシア語で Pribumi (先住民) と呼ぶ。本論文でもインドネシア国内にルーツを持つものを指してこの「プリブミ」を用い、「華人」と区別する。

世界に広がる華人のうち、約85%が東南アジアに居住している（田中 2008）とされるが、国により、華人の総人口に対する割合や置かれた立場は様々である。約2億4千万の人口を擁するインドネシアにおける華人口は、割合こそ2~3%ではあるが、人数では700万人以上と推定される。インドネシア華人の出身地は、東南アジア全般と同じく、華南地域（福建省や広東省など）が中心となっている。出身地域により、福州語、福建語、潮州語、客家語、広東語などを話していた。唐の時代から東南アジアとの交易が盛んになり、北宋時代に規模が大きくなり、明代には東南アジア各地に唐人街が形成された（田中 2002）。オランダがインドネシア地域の宗主国となったあとも、1850年以前は主に貿易に携わる商人が移民し、故郷との関係を保って商売をしており、1850年以降は苦力（苦力、肉体労働者）として移民するものが増えた（Wang 2006）。オランダ時代はエスニックグループごとに居住が許可され、華人（当時「外来東洋人」という区分とされていた）も指定された地域に固まって住んでいた。オランダは既存の支配者勢力を通じて住民の統治を行ったが、徴税の役割を華人に担わせることがあった（中村 1969）。また、先住民と、華人・アラブ人・インド系など外来の民族とは権利の上では同等としたが、明白に区別していた。このようなオランダ植民地時代の統治形態はインドネシア独立以降の華人への差別につながっていく。（Pramoedya 1960）。

独立後、スカルノ大統領は、共産党を支持することにより国軍とのバランスをとっていたこともあり、華人に対しても閣僚に登用されるものもいるなど政治の世界でも活躍することができた（北村 2014）。しかし、その後のスハルト大統領の時代になると中国共産党を敵対視し、華人はその手先とみなされ迫害を受けることになる。具体的には、中国語教育の禁止、公の場での中国語使用の禁止、中国寺院での宗教儀式や春節などの伝統文化など「華人性」を表現する活動を禁止していった（北村 2014）。また、9.30事件の余波でインドネシア各地で共産党と目された人々が虐殺され、華人もまた中国共産党とのつながりを疑われて虐殺の対象となった（倉沢 2014）。

このため、インドネシア華人は1960年代後半から1990年代終わりごろまでは、華人性を前面に出すことができず、中国語教育や中国由来の宗教活動を活発に行うことを控えざるを得なかった。インド由来の仏教は信仰が認められていたが、儒教に関しては1970年代半ばから宗教としては認めない方針が出された（北村 2014）。スハルトの失脚による政情不安にもなって1998年5月にも反華人暴動が起こった。

このような状況下ではあっても、華人は集住していることがほとんどであり、通婚も華人同士の割合が高く、祖先の言語である中国南部の各方言（主に福建語、潮州語、客家語など）は話し言葉としてある程度伝達されてきた。しかし、華人は一般に教育熱心で子どもに大学教育以上の教育を授けようとすることが多いが、インドネシアでの高等教育はインドネシア語標準変種および英語などの外国語が必須となる。また、中国語教育が禁止されていたスハルト時代では、中国語の書き言葉を身に付けさせることは非常に難しかった。

2000年代以降は、30年以上にわたって大きな制約を受けてきた華人文化や中国語は、その制約を解かれた。パスキ・ブルナマ（通称ア・ホック）のようなジャカルタ特別州知事に上りつめる華人政治家も出現した。（ただし、彼はイスラーム団体から敵視されており、その後2017年にイスラーム教を冒とくした罪で有罪判決を受けて失職した。）中国の著しい経

済発展にともない中国とインドネシアのつながりも重視されるようになるにつれ、華人も中国文化の継承や中国語の習得に熱心になる傾向が強くなる。2000年代以降、私立学校が急激に増加しているインドネシアでは、それぞれの特色を出すため、外国語として英語に加えて中国語を選択できるようにしている学校も多い。また、英語やコンピュータ、会計などを教える専門学校は以前より多数存在したが、中国語を教える専門学校も増えている。ただし、この場合の「中国語」というのは、華人の祖先の言語である福建語、潮州語、客家語をはじめとする華南地域の方言ではなく、「普通語（中国語標準方言あるいはマンダリン）」である。この言語変種はインドネシア語では Bahasa Mandarin あるいは Bahasa Cina と呼ばれることが多いが、Bahasa Tionghoa と呼ぶ人もいる。

現在では、祖先の言語が華人集団にどれだけ伝達されているのだろうか。華人はどの言語をどの場面で使用し、祖先の言語たる華南地域の方言や中国語標準方言に対してどのような見識を持っているのだろうか。これらの問を解決するのが本論文の目的である。

以下、調査票においては華人をインドネシアで華人を表す Tionghoa と表記することがある。

3. ランブン市における調査

3.1 調査法

筆者は、共同研究者の Sri Budi Lestari 氏とともに、ランブン市において言語使用実態の現地調査を2017年8月に行った。インドネシア語口語変種の変異を探るため、調査項目は発音や談話の採録、文法事項の確認を行った。また、言語使用実態を調査するため、移民してきた民族のうち大多数を占めるジャワ人グループ（63%）、ランブン人グループ（13%）と、商業活動で目立つ華人グループ（人口比では1%以下）に分けて社会言語学的調査票を配布した。

調査票の配布にあたっては、現地の協力者に属性ごとに数人から数十人を集めてもらい、紙のアンケートに記入してもらう形式で行った。字を読むのが難しい人に対しては、現地協力者および筆者がインドネシア語で質問し、答を書きとるという作業を行った。

本論文においては、このうち、華人グループの言語使用実態について結果をまとめる。

3.2 調査票の調査項目

今回の調査においては、インドネシア語の書き言葉（標準変種）で作成した調査票を用いた。調査票には大きく分けて三種類の質問項目を含めた。第一にアンケート回答者の情報を聞くものが12項目あり、こちらは学歴や性別を除き自由記述である。「姓名」「生年月日」「性別」「学歴」「職業」「父親の民族」「母親の民族」「配偶者の民族」「現在の住所」「小さいときに住んでいた所」「他の地域に住んだことがあるか、ある場合はどの地域か」「未婚か既婚か」を問うた。このうち、本論文の分析に関連するのは生年月日、両親の民族、居住地域である。

第二に場面ごとにどの言語を使用するかを答える25項目は、選択式である。選択肢は「インドネシア標準変種（Bahasa Indonesia Baku）」「インドネシア語口語（Bahasa Indone-

sia Pergaulan)」「中国語 (Bahasa Tionghoa)」「中国語地域方言 (Bahasa Daerah Tionghoa)」、「インドネシア地方語 (Bahasa Daerah Inonesia)」「その他 (lain-lain)」という6つを与え、その他の選択肢の下には具体的な言語名を記せるようにした。いくつかの言語変種を混ぜて使用している場合は「その他」のところにどの言語とどの言語を混ぜて使用しているかを記載してもらった。

「インドネシア語標準変種」は書き言葉として公教育で学ぶ変種である。「インドネシア語口語」はランブン州で一般に日常用語として用いられている口語変種を指す。「中国語」とあるのは、現時点で学校や専門学校などで学ぶことのできる「普通語 (中国語標準語)」を指す。「中国語地域方言」とあるのは福建語、潮州語、客家語などの華南地域の方言のことである。「インドネシア地方語」は、インドネシア各地の民族語 (ジャワ語、ランブン語など) を指す。現実的に考えて、華人がこの「インドネシア地域語」を話すことはないと思われるが、両親のどちらかがジャワ人やスダ人であった場合に、その言語を話すことも可能性としてはあるので、選択肢の中に入れた。これらの用語は回答者が誤解をしたり理解できなかったりすると意味がないので、事前に十分なインタビューを行い、こちらが意図している言語変種が、確実に回答者に伝わることを確認してある。

回答者が言及した中国語の名称は、Mandarin、Khek、Hokkian、Tio Cio、Tionghoa の四種類であった。Mandarin は中国語標準変種 (普通語)、Khek は客家語、Hokkian は福建語、Tio Cio は潮州語を指す (インドネシア語では Tiochiu と書かれることもある)。Tionghoa は多くの場合、Mandarin と同義で用い、中国語標準変種を指すが、回答者によっては Khek あるいは Hokkian を指している可能性も排除しきれない。

25項目で質問したのは、以下の通りである。(1) 一番得意な言語、(2) 一番よく使う言語、(3) 孫に使う言語 (該当者のみ回答)、(4) 子供に使う言語 (該当者のみ回答)、(5) 父親に対して家で使う言語、(6) 母親に対して家で使う言語、(7) 家の外で父親あるいは母親に対して使う言語、(8) 家の中で兄弟に対して使う言語、(9) 家の外で兄弟に対して使う言語、(10) 家の中で配偶者と話すときに使う言語、(11) 年上の Tionghoa (華人) と話すときに使う言語、(12) 年下の Tionghoa と話すときに使う言語、(13) 同年代の Tionghoa と話すときに使う言語、(14) 親しい友達と話すときに使う言語、(15) よく知らない人と話すときに使う言語、(16) 種会などで儀式が行われる前、友達と話すときに使う言語、(17) 学校で勉強するときに先生に対して使う言語、(18) 学校で休み時間に友達と話すときに使う言語、(19) 銀行・入管など役所で仕事中の役人と話すときに使う言語、(20) まだ言葉話さない子どもをあやすときに使う言語、(21) 怒っているときに使う言語、(22) 一人で祈るときに使う言語、(23) お金や他の者を数えるときに使う言語、(24) 自分の待ちの市場で買い物するときに使う言語、(25) 自宅の近くのワルン (小規模商店) で買い物をするときに使う言語はそれぞれ何か。

第三の調査項目は使用する言語に対する態度や考え方を問うものである。以下の6項目を(1) 以外は自由記述で尋ねた。(1) Tionghoa の言語を自分の子どもに教えたか、(2) Tionghoa 語で書かれた書物は家にあるか、あるとしたらどんな書物か、(3) あなたの歌手は誰か、その人は何語で歌っているか、(4) あなたが一番好きな言語は何か、それはなぜか、(5) あなたの子どもに一番最初に獲得してほしい言語は何か、(6) Tionghoa 語はこれから

もずっと使われ続けると思うか、それはなぜか。回答者は、(1)については「はい」か「いいえ」のどちらかを選択、それ以外は自由記述で回答した。

3.4 調査票結果の分析方法

次節以下ではアンケートのデータを、それぞれの言語使用領域に分けて示す。内海 2010 および内海 2011 で、筆者はインドネシアの北部スラウェシ州の民族語について今回のランブン市における調査に類似した調査を行った。以下の分析では、これらの先行研究と同様、祖先の言語をどれだけ保持しているかに焦点を当てる。

第4節では、まず回答者の属性について述べ、その後「全般的な言語使用」、「家庭内での言語使用」、「家族以外の華人と話すときに使用する言語」、「公的な場で使用する言語」、「個人的な言語使用」の場面ごとにアンケート結果を分析する。第5節ではそれぞれの言語変種に対する認識についての回答をまとめる。

回答者（合計 45 名）は年代によって三つのグループに分けた。第一に 1931 年から 1960 年に生まれた者で 9 名、第二に 1961 年から 1980 年に生まれた者で 5 名、第三に 1981 年以降に生まれた者で 31 名である。それぞれ高齢層、中年層、若年層と呼ぶ。年代のグループ分けは便宜的なものであり、1980 年生まれと 1981 年生まれに決定的な差があるとは思われないが、分析の必要上、このような手法を取った。

4. 分析結果

4.1 回答者の属性

まず、回答者の両親の民族についての回答をまとめる。高齢層（1939 年から 1960 年以前に出生したもの）は、全員華人の両親のもとに生まれている。福建人の両親を持つ者が 1 名、客家人の両親を持つ者が 3 名である。そのほ 4 名が両親の民族を Tionghoa と記入しており、出身地まで同じであったかは分からない。1 名のみ、父親がシンガポールからの華僑、母親が客家であった。配偶者もほぼ全員が華人である。客家の両親のもとに生まれた 1 名は潮州人と結婚しているが、その他は両親が客家なら配偶者も客家、福建なら福建といった具合である。ただし、福建人の両親をもつものは、最初の妻が福建人だが、二番目の妻はジャワ人であった。

中年層（1961 年から 1980 年に出生したグループ）も高齢層と同様、華人の同じ出身地の両親のもとに生まれている。配偶者もほぼ全員が華人であるが、1 名のみパダン出身のインドネシア人であった。配偶者は他の地域出身の華人である者が 5 名中 2 名だった。

若年層（1981 年以降に出生したグループ）は 1993 年生まれまでの 11 名までは両親とも華人であるが、Tonghoa という記載が多く、出身地まで同じかは分からない。しかし、1994 年以降に生まれた 20 名中 4 名は両親のどちらかがプリブミ（先住民）のインドネシア人（ランブン人、ジャワ人、パレンバン出身者など）であった。配偶者に関しては、1992 年以降出生の者は未婚ばかりであった。1981 年から 1991 年に生まれた 10 名のうち 8 名は結婚しており、全員が華人との婚姻であった。

全般的に華人同士で結婚する傾向が強く、2017 年時点で 20 代から 30 代の若い層であっ

ても華人同士で結婚する確率が高い。華人のコミュニティで育つと自然に知り合うものが華人になるので自然にこのようになるのだろうが、他に宗教が華人同士の結婚の理由として挙げられるだろう。インドネシア人の大多数がイスラームであるのに対し、華人は仏教・儒教・道教などの中国伝来の宗教か、カトリックかプロテスタントであることが多い。イスラーム教徒と結婚する場合は改宗が必要になる場合も多いので⁵⁾、プリプミとの結婚が避けられる傾向は今後も続くだろう。内海 2010、2011 で述べたが、北スラウェシ州の少数民族の人々、バンティック人とタラウド人については、1940 年代に生まれた人々までは同じ民族同士で結婚する例が多かったが、徐々にその比率は低下し、1960 年代以降になると半分以上に低下していく。彼らもまたインドネシアでは圧倒的少数派のキリスト教徒が大半であり、イスラーム教徒と結婚する例は少ないものの、同じ北スラウェシ州の他民族との通婚は非常に多く、同じキリスト教徒であればトラジャ人（南部スラウェシ）やジャワ人と結婚する場合もあった。それに比べると、華人同士で結婚する傾向は若い世代でも大変強い。

両親ともに同じ出身地の華人である場合は、その言語が家庭内で使用される条件は整う。4.3 では家庭内での言語使用を論じる。

次に、居住地であるが、1993 年以降に出生（2017 年現在で 24 歳以下）の者はランブんにしか住んだことがないものが 20 名中 16 名だが、その他の年齢層ではおよそ 8 割が他地域に 1 年以上住んだことがあった。ランブんに近いバンカ島、ジャワ島（主にジャカルタ）、パレンバンなどが多い。高齢層や中年層でも 8 割が他地域に住んだことが多いのは、華人らしい傾向である。比較的学歴が高く、よりよい仕事の機会や商売をするために移動が多いというのが一般的だからだ。プリプミでも高学歴層ほどいろいろな地域に住んだ経験を持つ者が増えるので、居住地の選定という点では華人はインドネシアの高学歴層と同様であるといえる。一般的には居住地が一定でなく、生まれたコミュニティから離れる期間が多ければ多いほど、祖先の言語を保つのは難しい。

4.2 全体的な言語使用

ここでは言語使用に関する質問項目のうち、項目（1）一番得意な言語と項目（2）一番よく使う言語について論じる。まとめたものは表 1 に示す。

あらかじめ与えられた選択肢は 3 節で示した通り「インドネシア標準変種」「インドネシア語口語」「中国語」「中国語地域方言」、「インドネシア地域方言」「その他」であるが、「その他」を選んだものはいない。これ以降の議論では、それぞれ「イ標準」「イ口語」「中国語」「中方言」「イ方言」と短縮した語を使用する。なお、複数の回答を可としているので、二つの言語を挙げた者もいる。中国語地域方言とインドネシア地域方言についてはその具体的な名称を挙げている場合は表の中で示す。以降の分析においては、母集団が少ないので不適切ではあるが、理解を助けるために、それぞれの年齢層を母数にした割合をパーセンテージで表中に示した。

表 1 に「一番得意な言語」に対する回答を示した。高齢層は、半数ほどが中国語地域方言を得意な言語として挙げたが、その全員がインドネシア語標準変種あるいはイ口語変種も得意な言語として挙げているので、バイリンガルとしての自認がある。中年層のうち一人はイ口語と中方言（潮州語）の二つを挙げた。その他 4 名はイ標準かイ口語のみを得意な言語とし

て挙げている。若年層は8割近くが、イ標準とイ口語を両方得意な言語として挙げている。中国語と中方言を得意な言語と挙げた者は合計3名いるが、全員イ標準かイ口語をも得意な言語として挙げている。なお、中国語の方言名を明示したものはいなかった。回答者が少ないので、統計的に有意なことは言えないが、はっきりと高齢層から若年層に行くに従い、バイリンガル率が減り、インドネシア語だけを得意な言語として挙げる者が増えることが分かる。

表2には「一番よく使う言語」に対する回答を示した。全般的な傾向は表1と同様だが、高齢層と中年層のうち、中国語と中方言を選んだものが減っている。中国語と中方言を話す能力に自信はあるが、それらを実際にはあまり使用していないという自覚が見られる。

表1:「一番得意な言語は何か」に対する回答

	インドネシア語標準変種	インドネシア語口語変種	中国語	中国語地域方言	インドネシア地域方言	計
高齢層	5 (55%)	4 (44%)	0 (0%)	4 (44%) 福建語と明示した者2名	1 (11%) Banka語	9 (100%)
中年層	1 (20%)	4 (80%)	0 (0%)	1 (20%)	0 (0%)	5 (100%)
若年層	22 (70%)	25 (80%)	2 (6%)	1 (3%)	1 (3%)	31 (100%)

表2:「一番よく使う言語」に対する回答

	イ標準	イ口語	中国語	中方言	イ方言	計
高齢層	5 (55%)	4 (44%)	2 (22%)	2 (22%) 福建語と明示した者2名	1 (11%) Banka語	9 (100%)
中年層	1 (20%)	4 (80%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	5 (100%)
若年層	21 (67%)	24 (77%)	0 (0%)	1 (3%)	0 (0%)	31 (100%)

4.3 家庭内での言語使用

始めに、上の世代に対して使用する言語についてまとめる。親に対しては、項目(5)父親に対して家で使う言語、項目(6)母親に対して家で使う言語、項目(7)家の外で父親あるいは母親に対して使う言語の三つに分けて示した。選択肢は「イ標準」、「イ口語」、「中国語(中方言を含む)」、「中国語とインドネシア語の混合」、「中方言とインドネシア語の混合」の六つから選んでもらった。回答者はそれぞれ一つの選択肢を選んだ。

回答にあるBanka語はインドネシア語の口語変種の一つであるが発音などが大きく異なっている。回答者の感覚では日常的に使うインドネシア語口語変種とは異なるという認識のようなので、回答のままイ方言の欄に入れてある。両親の民族が異なる場合は、使用言語が異なる可能性がある。また、家の中と外で使う言語が違う可能性があるため、項目を分けた。

結果としては、3項目ともほぼ同じ傾向を示す。高齢層と中年層では8割程度の人が中国

語あるいは中国語とインドネシア語を混ぜて使うのに対し、若年層では中国語を使用するのは2割程度しかいない。高齢の人ほど、幼少のころ家庭で中国語の使用率が高かったことが分かる。父親と母親に対する言語は異なるものを選択している人が若干いたが、これは父親と母親の民族が異なる、あるいは中国語能力が異なることを示す。

多民族社会では、家の中という完全な私的空間と、他民族も聞いているかもしれない環境では、使用言語が異なることがある。高齢層、中年層も家の外ではインドネシア語を使用する割合が若干高まる。高齢層ではイ標準を選択した者が半数ほどいた。若年層では元々インドネシア語を使用する比率が高いので、割合としてはあまり変化がないが、数としてはやはり中国語を使用する者が減り、インドネシア語を使用する者が多くなる。

表3:「父親に対して家の中で使う言語」に対する回答

	イ標準	イ口語	中国語あるいは中方言	イ方言	中国語とインドネシア語	中方言とインドネシア語	計
高齢層	1 (11%)	1 (11%)	3 (33%)	1 (11%) Banka 語	0 (0%)	3 (33%)	9 (100%)
中年層	0 (0%)	1 (20%)	1 (20%)	1 (20%) Lampung 語	1 (20%)	1 (20%)	5 (100%)
若年層	3 (9%)	19 (61%)	1 (3%)	0 (0%)	4 (13%)	4 (13%)	31 (100%)

表4:「母親に対して家の中で使う言語」に対する回答

	イ標準	イ口語	中国語あるいは中方言	イ方言	中国語とインドネシア語	中方言とインドネシア語	計
高齢層	2 (22%)	0 (0%)	3 (33%)	1 (11%) Banka 語	0 (0%)	3 (33%)	9 (100%)
中年層	0 (0%)	1 (20%)	1 (20%)	1 (20%) Lampung 語	1 (20%)	1 (20%)	5 (100%)
若年層	5 (16%)	19 (61%)	1 (3%)	0 (0%)	4 (12%)	3 (9%)	31 (100%)

表5:「両親に対して家の外で使う言語」に対する回答

	イ標準	イ口語	中国語あるいは中方言	イ方言	中国語とインドネシア語	中方言とインドネシア語	計
高齢層	4 (44%)	0 (0%)	2 (22%)	1 (11%) Banka 語	0 (0%)	1 (11%)	9 (100%) 無回答一名

中年層	0 (0%)	0 (0%)	1 (20%)	1 (20%) Lampung 語	1 (20%)	2 (40%)	5 (100%)
若年層	4 (12%)	22 (70%)	1 (3%)	0 (0%)	3 (9%)	1 (3%)	31 (100%)

項目(8)家の中で兄弟に対して使う言語、項目(9)家の外で兄弟に対して使う言語の回答は表6にまとめた。家の内と外を比べると、確かに高齢層と若年層でインドネシア語を選択したものが一名ずつ増えているものの、さしたる差異は認められない。年齢が上の者の方が中国語あるいはインドネシア語と中国語の混合を選ぶものが多いが、高齢層で5割、中年層で4割なので、同世代のものとの会話においては親に対してよりもインドネシア語を選ぶものの割合が増えている(親の世代では8割程度)。若年層では圧倒的に(9割近く)インドネシア語が選ばれている。

表6:「兄弟に対して使う言語」に対する回答

	イ標準	イ口語	中国語あるいは中方言	イ方言	中国語とインドネシア語	中方言とインドネシア語	計
高齢層							9
家の中	2 (22%)	1 (11%)	3 (33%)	1 (11%)	0 (0%)	2 (22%)	(100%)
家の外	3 (33%)	2 (22%)	2 (22%)	1 (11%)	0 (0%)	0 (0%)	無回答一名
中年層							5
家の中	0 (0%)	2 (40%)	0 (0%)	1 (20%)	0 (0%)	2 (40%)	(100%)
家の外	0 (0%)	2 (40%)	0 (0%)	1 (20%)	0 (0%)	2 (40%)	
若年層							31
家の中	1 (3%)	26 (83%)	1 (3%)	0 (0%)	1 (3%)	2 (6%)	(100%)
家の外	1 (3%)	27 (87%)	1 (3%)	0 (0%)	1 (3%)	1 (3%)	

(10) 家の中で配偶者と話すときに使う言語についての回答は表7に示した。若年層で結婚している人は17名なので、総数が減っている。配偶者に対して使用する言語は、兄弟に対する言語と同じ傾向であるものの、若干インドネシア語使用率があがっている。中国語をわずかでも使用する者は高齢層では3割、中年層では2割、若年層では1割に満たない。

表7:「家の中で配偶者と話すときに使う言語」に対する回答

	イ標準	イ口語	中国語あるいは中方言	イ方言	中国語とインドネシア語	中方言とインドネシア語	計
高齢層	3 (33%)	2 (22%)	3 (33%)	1 (11%)	0 (0%)	0 (0%)	9 (100%)

中年層	0 (0%)	3 (60%)	0 (0%)	1 (20%)	1 (20%)	0 (0%)	5 (100%)
若年層	1 (6%)	15 (88%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (6%)	0 (0%)	17 (100%)

次に、自分よりも下の世代に対する言語使用を見てみよう。項目（3）孫に使う言語（該当者のみ回答）と項目（4）子供に使う言語（該当者のみ回答）については表8にまとめた。若年層は年代的に孫がいないので、項目（4）のみ記した。高齢層に関しては孫には使うが子供には使わないものが1名いる。少しでも中国語を使用するものは4割程度である。中年層に関しても、孫に対しては使うが子供には使わないものが1名いる。少しでも中国語を話すのは2割となっている。若年層ではこの割合が1割以下に下がる。項目（20）まだ言葉を話さない子どもをあやすときに使う言語、に対する回答もほぼ表8と同じであった。

以上をまとめると、中国語を使用する割合は、聞き手の世代が下がるにしたがって少なくなることが分かる。

表8:「孫に使う言語」「子供に使う言語」に対する回答

	イ標準	イ口語	中国語あるいは中方言	イ方言	中国語とインドネシア語	中方言とインドネシア語	計
高齢層							
対孫	1 (11%)	4 (44%)	2 (22%)	0 (0%)	1 (11%)	1 (11%)	9
対子供	2 (22%)	3 (33%)	0 (0%)	1 (11%)	1 (11%)	2 (22%)	(100%)
中年層							
対孫	0 (0%)	3 (60%)	0 (0%)	1 (20%)	1 (20%)	0 (0%)	4
対子供	0 (0%)	4 (80%)	0 (0%)	1 (20%)	0 (0%)	0 (0%)	5
若年層							
対子供	4 (23%)	12 (70%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (6%)	0 (0%)	17 (100%)

4.4 家族以外の華人と話すときに使用する言語

家族に対しては、世代が上の成員に対しては高齢層ほど中国語の使用が多かった。それでは家族以外の華人に対してはどうだろうか。年上、同年代、年下に分けて言語使用を問うた。項目（11）年上の Tionghoa（華人）と話すときに使う言語、項目（12）年下の Tionghoa と話すときに使う言語、項目（13）同年代の Tionghoa と話すときに使う言語、の回答を表9にまとめた。

結果から言うと、家族に対しての言語使用と、家族以外の華人に対しての言語使用にはほぼ変わらない。高齢層は半数くらい中国語を使用するが、若年層では中国語使用率は1割か2割程度である。若年層においては、聞き手の年齢が上がるほど、中国語を使用する人が増える。ただ、圧倒的多数はイ口語を選択する。高齢層に関しては、イ標準語も半数ほどが

選択するのにに対して、イ口語は使用しない。これは、高齢層ほどイ口語が他人に使用できる地位がないと感じているからかもしれない。なお、項目(14) 親しい友達と話すときに使う言語の回答は、ほぼ同年代の華人に対する回答と同じだったので、本論文では割愛する。

表9：家族以外の華人に対して使用する言語に対する回答

	イ標準	イ口語	中国語あるいは中方言	イ方言	中国語とインドネシア語	中方言とインドネシア語	計
高齢層							
対年上	4 (44%)	0 (0%)	1 (11%)	1 (11%)	1 (11%)	2 (22%)	9 (100%)
対同年代	4 (50%)	0 (0%)	3 (37%)	1 (12%)	0 (0%)	0 (0%)	8 (100%)
対年下	4 (44%)	0 (0%)	1 (11%)	0 (0%)	3 (33%)	1 (11%)	9 (100%)
中年層							
対年上	0 (0%)	2 (40%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (20%)	2 (40%)	5 (100%)
対同年代	1 (20%)	2 (40%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	2 (40%)	5 (100%)
対年下	1 (20%)	2 (40%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	2 (40%)	5 (100%)
若年層							
対年上	3 (10%)	19 (63%)	1 (3%)	0 (0%)	7 (23%)	1 (3%)	0 (100%)
対同年代	1 (3%)	24 (80%)	0 (0%)	0 (0%)	4 (13%)	1 (3%)	30 (100%)
対年下	2 (6%)	23 (74%)	1 (3%)	0 (0%)	4 (12%)	1 (3%)	31 (100%)

4.5 公的な場で使用する言語

ここでは項目(15) よく知らない人と話すときに使う言語と項目(19) 銀行・入管など役所で仕事する役人と話すときに使う言語に対する回答を論じる。表10に項目(15)の回答、表11に項目(19)の回答を示した。無回答は除いて割合を出してある。

これらの質問で、「よく知らない人」あるいは「役所で働いている人」は、華人ではないという想定があったのかもしれないが、中国語を使用する人はほぼいない。若年層のみインドネシア語と中国語の混合を使用すると答えた者が1名いるが、他はすべてイ標準語かイ口語を選択した。若い人の方がイ口語を使用する率が多い。これも、高齢層より若年層の方がインドネシア語口語変種に対する偏見が少なく、その地位を高くみなしているからだろう。項目(24)「自分の町の市場で買い物するときに使う言語」と項目(25)「自宅近くのワルンで使用する言語」は表10に近い結果が出た(詳細は割愛)。

表10：「よく知らない人と話すときに使う言語」に対する回答

	イ標準	イ口語	中国語あるいは中方言	イ方言	中国語・中方言とインドネシア語	計
高齢層	4 (57%)	3 (42%)	0 (0%)	1 (11%)	0 (0%) 0 (0%)	7 (100%)
中年層	3 (60%)	2 (40%)	0 (0%)	0 (20%)	0 (0%)	5 (100%)

若年層	8 (27%)	21 (72%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	29 (100%)
-----	---------	----------	--------	--------	--------	-----------

表 11:「銀行・入管など役所で仕事中の役人と話すときに使う言語」に対する回答

	イ標準	イ口語	中国語ある いは中方言	イ方言	中国語・中方言とイン ドネシア語	計
高齢層	4 (57%)	3 (42%)	0 (0%)	1 (11%)	0 (0%)	7 (100%)
中年層	3 (60%)	2 (60%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	5 (100%)
若年層	8 (29%)	18 (66%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (3%)	27 (100%)

4.6 個人的な言語使用

ここでは、項目 (21) 怒っているときに使う言語、項目 (22) 一人で祈るときに使う言語、項目 (23) お金や他の物を数えるときに使う言語、に対する回答について表 12 にまとめた。これらの項目は、感情が高ぶっているときや、自分以外に聞き手を想定しない言語使用であり、一番自然に出てくる言語であると考えられる。高齢層では聞き手を想定しないとインドネシア語のみ使用する者と中国語を交える者の割合が半々だが、怒るときは聞き手がいるのでインドネシア語使用率が若干増える。中年層でも、怒るときは全員インドネシア語を使用するが、聞き手を想定しない時は半数ほどが中国語を交える。若年層では圧倒的にインドネシア語を使用する（イ標準語かイ口語）。中国語を交えるものは1割程度である。

表 12:「怒っているときに使う言語」「一人で祈るとき」「お金や他のものを数えるとき」に対する回答

	イ標準	イ口語	中国語ある いは中方言	イ方言	中国語と インドネ シア語	中方言と インドネ シア語	計
高齢層							
怒るとき	4 (57%)	2 (28%)	0 (0%)	1 (14%)	0 (0%)	0 (0%)	7 (100%)
祈るとき	4 (50%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (12%)	2 (25%)	0 (0%)	8 (100%)
数えるとき	4 (44%)	0 (0%)	2 (22%)	1 (11%)	2 (22%)	0 (0%)	9 (100%)
中年層							
怒るとき	1 (20%)	4 (80%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	5 (100%)
祈るとき	2 (40%)	1 (20%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (20%)	1 (20%)	5 (100%)
数えるとき	1 (20%)	1 (20%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (20%)	2 (40%)	5 (100%)
若年層							
怒るとき	3 (10%)	22 (78%)	0 (0%)	0 (0%)	3 (10%)	0 (0%)	28 (100%)
祈るとき	5 (17%)	21 (72%)	0 (0%)	0 (0%)	3 (10%)	0 (0%)	29 (100%)

数えるとき	2 (6%)	24 (77%)	2 (6%)	0 (0%)	3 (9%)	0 (0%)	31 (100%)
-------	--------	----------	--------	--------	--------	--------	-----------

4.7 華人の言語使用のまとめ

ランブン市の華人は、高齢層でも中国語あるいは中方言を使用する場面は多くなく、一番得意な言語についても半数ほどこしか中国語・中方言を挙げない。インドネシア語の使用範囲の方がずっと多いのが現状である。高齢層、中年層は自分より上の世代の家族や家族以外の華人に対して中国語・中方言・中国語とインドネシア語を選択することが多いが、同年代ではこの割合が下がり、下の年代に対しては多くがインドネシア語を使用する。華人以外には当然インドネシア語を中心に使用する。予想に反して、数を数えるときや一人で祈るときも中国語・中方言を少しでも使用すると答えた者が、高齢層・中年層でも半数くらいしかいなかった。

若年層では明らかに中国語とのバイリンガル率が激減し、ほぼすべての場面でインドネシア語を選択するようになる。家族に対してさえ、インドネシア語で会話しており、中国語・中方言をわずかでも使用する割合は1割程度である。また、若年層では様々な場面で明らかにインドネシア語の口語変種を標準変種より好む割合が増えている。インドネシア語の使用範囲が増えるにつれ、口語変種に対するイメージがよくなって、公的な場面での使用に抵抗感がなくなっているのではないかと推察される。

5. 華人の言語に対する態度・考え方

この節では、それぞれの言語変種に対する態度や考え方を問うた自由記述の回答について述べる。

まず、項目(1) Tionghoa の言語を自分の子どもに教えたか、に対する回答であるが、教えたことがあるのは、高齢層では8人中7人が教えたと回答した。中年層では5人中2人のみ、若年では17人中4人のみである。1960年代以降に生まれた者は、ほとんど祖先の言語を下の世代に伝承していないことが分かる。

項目(2) Tionghoa 語で書かれた書物は家にあるか、あるとしたらどんな書物か、に対する回答は、ほとんど「ない」というものであった。高齢層では2人が「ある」と答え、そのうち一人は多数の様々なジャンルの書物を所有していたが、もう一人は聖書などごく少数と答えた。中年層は全員が「ない」と答えたが、若年層では5人が「ある」と答えた。その書物はほとんどが中国語学習のための教材か、学習目的で購入した童話などである。高齢層・中年層においては中国語を読み書きする者は例外的であるが、若年層では少しずつ中国語習得に前向きなものが増えていることがうかがえる。若年層が所有している書物は祖先の言語である中国語華南地域の方言ではなく、中国語標準語である。

項目(3) あなたの歌手は誰か、その人は何語で歌っているか、に対して中国語で歌っている歌手を挙げた者は若年層の1名を除き、どの年齢層も皆無であった。インドネシア語が圧倒的に多いが、英語、韓国語、日本語を挙げるものもいる。中国の古今の文化に特に親しんでいるわけではない。

項目(4) あなたが一番好きな言語は何か、それはなぜか、に対して、中国語と答えた者は少ない。高齢層では9人中3人が中国語・中方言、4人がインドネシア語を挙げた。その他2人は「いろいろな言語」と答えた。中年層では中国語・中方言を挙げた者はおらず、ランブン語が1名、インドネシア語が4名、英語が1名であった。若年層では1名が中国語(Mandarin)を挙げたが、他は約半数がインドネシア語、残りが英語を挙げた。日本語を挙げた者も1名いる。

項目(5) あなたの子どもに一番最初に獲得してほしい言語は何か、に対しても、項目(4)と同様の回答が得られた。高齢層が1名がMandarin(中国語標準語)、1名が福建語を挙げたが、残りの7名はインドネシア語を挙げた。中年層では2名が福建語、1名が英語、2名がインドネシア語を挙げた。若年層ではインドネシア語が12名、英語とインドネシア語を挙げた者が2名、英語と中国語を挙げた者が1名、英語を挙げた者が11名、英語と日本語を挙げた者が1名であった(無回答4名)。

項目(6) Tionghoa語はこれからもずっと使われ続けると思うか、それはなぜか、については、上記項目とは異なった傾向がみられる。高齢層の8名が「はい」と答え、その理由として「家族の言語だから」「まだ中国語・中国語の方言を使用しているものが多い」「まだコミュニティで使用されている」と答えた。中年層の4名が「はい」と答え、「伝統だから」と答えたものが1名、残りは「中国語使用人口が多い、ビジネスで使用する」ことを理由として挙げた。若年層でもほぼ全員が「はい」と答え(残りは無回答)、その理由として「中国語使用人口が多い」「中国からくる人が多い」「中国語は国際的なビジネス用語」になっている」とするものが大半で、2名が「祖先の言語だから、家族に伝える言語だから」という理由を挙げた。中国語が使用され続ける理由を見ると、高齢層は「自分たちが使用している中国語方言がコミュニティの言語、家族の言語として伝承されるか」という質問だと受け取って答えているのが分かる。それに対し、中年層と若年層は、現在の中国の経済力や中国人の往来を念頭に、中国語標準方言について答えているようだ。

この言語態度に関する質問からも、ランブンの華人社会では祖先の言語の使用が少なくなり、子ども世代に伝えていっていないこと、中国文化がそれほど身近でないことが分かる。しかし、現在のビジネスシーンにおける中国語の有益性は十分認識し、祖先の言語ではなく中国標準方言の習得に価値を置いている。ただし、英語をまず習得すべきだと考える者の方が多い。

6. まとめ

本論文では、2017年にランブンの華人に対して行った社会言語的調査の結果をまとめた。回答者は1939年から2002年生まれ、合計45名である。華人は、華人同士で通婚するケースが圧倒的に多く、若年層に至ってもその傾向は変わらない。華人が集住する傾向も強く、仏教・道教寺院やキリスト教の教会を介して華人コミュニティがしっかりと存在している。しかし、祖先の言語である中国華南地域の各方言(特に福建語、客家語、潮州語)が活発に用いられていたのは、高齢層(1960年以前に出生の者)が子供のころ(1960年代ごろまで)であったようだ。主に中国語を使用するという回答が得られたのは、高齢層が、

同世代以上に対して用いる場面だからである。スハルト以降のインドネシアで華人が置かれた厳しい状況により、祖先の言語の伝承はほぼ途切れてしまった。

現在では中国語の経済力の増加に伴い、多くのインドネシア人が中国語を学習したり、中国とのビジネスに関わりたいたいと考えている。華人もルーツが中国にあるだけに、そう考えている人は多いと想像されるが、実際にはそれほど積極的に中国語の習得を行っていない。また、ここで学習しようとする中国語は中国語標準語（Manadarin、普通語）であって、祖先の言語である華南地域の方言習得したいとは考えていないようである。

ランプン市は、元々住んでいた民族であるランプン人の割合が十数パーセントで、ジャワ島やスマトラ島の他の都市からの流入が多く、外来者の多い地域である。国家語であるインドネシア語がランプン市民の共通語になるのは当然のなりゆきである。今後は、ランプン人とジャワ人に対する調査の結果を分析し、華人コミュニティにおける言語使用の特徴を浮かび上がらせていきたい。

参考文献

- Adelaar, Karl Alexander. 2005. Malayo-Sumbawan. *Oceanic Linguistics* 44 (2): 356-388. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Amisani, Diana. 1985. *Kedudukan dan fungsi Bahasa Lampung*. Jakarta: Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa, Departmen Pendidikan dan Kebudayaan.
- Anderbeck, Karl Ronald. 2007. An Initial Reconstruction of Proto-Lampungic: Phonology and basic vocabulary. *Studies in Philippine Languages and Cultures*. Vol 16: 41-165. SIL International.
- Badan Pusat Statistik Provinsi Lampung. 2010. 'Penduduk Provinsi Lampung Hasil Sensus Penduduk 2010'. Website (Last viewed date: 4th January 2021)
<https://lampung.bps.go.id/publication/2016/09/23/1ac462e0fd08105514a485b8/penduduk-provinsi-lampunghasil-sensus-penduduk-2010.html>
- Collins, James T (1998). *Malay, World Language: A short history*. Jakarta: Dewan Bahasa dan Pustaka.
- 北村由美 (2014) 『インドネシア 創られゆく華人文化—民主化以降の表象をめぐって—』。東京：明石書店。
- 倉沢愛子 (2014)。『9.30 世界を震撼させた日—インドネシア政変の真相と影響—』。東京：岩波書店（岩波現代全書）。
- Matanggui, Junaiah H. 1984. Fonologi Bahasa Lampung Dialek O. *Linguistik Indonesia*. Vol 2: 63-76.
- Pramoedya, Ananta Toer. 1960 *Hoakiau di Indonesia* (The Chinese in Indonesia). Jakarta: Bintang Press.
- 田中恭子 (2002) 『国家と移民—東南アジア華人世界の変容—』。名古屋大学出版会。
- 内海敦子 2010 「インドネシアにおける地域語・民族語の使用実態—Bantik 語の事例を中心に—」『明星大学研究紀要—日本文化学部—言語文化学科』第18号 pp 205-234.
- 内海敦子 2011 「タラウド語使用地域の言語使用と言語意識—インドネシア国、北スラウェ

シ州における民族語使用実態―』『明星大学研究紀要―日本文化学部―日本文化学科』
第 19 号。pp 217-234.

Wang, Gangwu. 2002. *The Chinese Overseas: From Earthbound China to the Quest for Autonomy*. Cambridge: Harvard University Press.

Yoshihara, Kunio (ed) 1989. *Oei Tiong Ham Concern: The first Business Empire of Southeast Asia*. Kyoto: Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University.

註

- 1) 本論文は科学研究補助金基盤研究 (C) 課題番号 15K02531 により行った調査の結果をまとめたものである。また、データの分析に関しては Sri Budi Lestari 氏から多大な助力を得た。
- 2) Bandar Lampung は、以前は Tanjungkarang と Telukbetung の二つの中心地域からなっていたため、Tanjungkarang-Telukbetung と呼ばれていた。
- 3) Badan Pusat Statistik Provinsi Lampung. 2010 によると、ランブン州全体の人口内訳は以下の通りである。ジャワ人 (63%)、ランブン人 (13%)、スンダ人 (0.09%)、他のスマトラ島出身者 (0.05%)、バンテン人 (0.02%)、バリ人 (0.013%)、他の民族：ミナンカバウ人、バタック人、中華系、プギス人 (0.03%)。
- 4) Api 方言は Lampung Api, あるいは Pesisir あるいは Dialek A Lampung Api (juga disebut Pesisir atau dialek A), Lampung Nyo (juga disebut Abung atau dialek O), dan Komering
- 5) イスラーム教徒の男性と結婚する女性は「啓展の民」、つまりキリスト教徒かユダヤ教徒であればよいとされることもあるが、家族から改宗を迫られることもある。イスラーム教徒の女性はイスラーム教徒の男性としか結婚できない。